



『イルカ概論 日本近海産小型鯨類の生態と保全』

粕谷俊雄 著

2019年2月
東京大学出版会 発行
337頁
定価（本体 4,800円＋税）

大杉祐生・浅川満彦

（酪農学園大学 獣医学群 獣医学類 感染・病理学分野
医動物学ユニット / 野生動物医学センター WAMC）

本書は浅川（2014）で紹介した書籍の内容を「横観」し、その「解釈」を加えることが大きな目的とされた。したがって、その大部な書籍に感銘を受けた方あるいは消化不良であった方は、両書を読み比べてみたい。しかし、今回、本書を紹介するゼミ生のように、前著未見でも（また、特に、鯨類に関心が無くても）、十分堪能をしていたようだ。

なので、特に、水族館、海洋環境、水産資源などに関心のある学生さんは安心して読み込んで欲しい。そして、もし、深く知りたいと思ったら、その大部な前著（しかも高価なので図書館で探そう）、ならびにその増補改訂&英語版のKasuya（2017）に挑戦し、加えて、本書「引用文献」にある数多論文や水産庁あるいはIWCなどの刊行物を渉猟しよう。ただし、概して、英語論文の方が最新のものが収載され、充実しているので、英語からは逃れられないことは覚悟して欲しい。（浅川 文責）

本書は7つの章で構成され、日本近海に生息する小型鯨類の動物相と多様な生活史を詳らかに記載し、保全において留意すべき諸点を示している。各章について内容を概説する。

第1章：クジラとイルカの区別から始まり、鯨類の進化の歴史や系統学的な点について触れている。パキセタス属という鯨類の最古の祖先の形態や、現生の鯨類との歯の形態の比較など、解剖学的な面白さも感じられるのではないだろうか。

第2章：日本近海の種の生息環境について海流や日本周辺の海洋構造から水温と各日本産小型鯨類の生息環境との関連性、水温以外の分布要因について調査結果を用い詳細に記載されていた。

第3章：食性研究は海洋生態系における鯨類の位置を知る上で重要で、また、漁業との関係性を知る上でも重要である。本章では鯨類の形態学的特徴と食性の関係、各小型鯨類の食性、季節性変化、分布域による食性の違いなどについても触れ、また、鯨類

の食性の「文化」についても述べていた。特に、食性と「文化」についての項目で、たとえば、シャチでは哺乳類を餌にするタイプと魚類を捕食するタイプの2つに大別され、それぞれの食性によって群れの大きさと社会性が違い、その「文化」が継承されるという。鯨類の高度な社会性を表しており、非常に興味深かった。

第4章：ザトウクジラやコククジラでは外部特徴による個体識別が容易であることから、回遊の研究が容易であるが、日本近海の小型鯨類については季節移動が調べられている例はほとんどなく、少なくとも、「回遊はしているようだ」程度に過ぎないという。なんと謎めいた動物なのか。本章では1種1種詳細に記載しており、各小型鯨類の特徴を知る上で必須となろう。

第5章：社会構造や受胎から出生、独立、繁殖、そして死までの記載である。また、漁獲への反応についても言及され、特に興味深かったのが、生態と捕鯨業との関係である。種によっては、群れの中のどの個体が捕獲されるかによって、残された個体の生存や繁殖が影響を受けることもあるという。たとえば、コビレゴンドウでは高齢の雌が「文化」(前述)の担い手として機能し、群れ全体の生存に寄与するらしい。そのため、そのような個体を間引いた場合、残された個体の生存に大きな影響を与える可能性があるという。実際の捕鯨での作業上、難しいかもしれないが、そういった「文化」の伝承者を捕獲しないようにすることが、鯨類を資源として今後も利用するため必要と感じた。

第6章：日本の捕鯨操業の歴史から漁業方法(突きん棒漁業や石弓漁業、追い込み漁業など)海域ごとの操業状況、捕鯨小型鯨類の捕鯨について述べている。本章では捕鯨産業と関係国政府による科学者の支配や漁獲データの改竄、行政と捕鯨産業の癒着や協力についても触れており、あらためて、捕鯨産業の大きさを感じた。

第7章：壱岐でのイルカによる漁業被害を例として挙げていた。壱岐ではブリの一本釣りが盛んである一方で、イルカによる漁業被害も大きい。イルカによる漁業被害に耐えかねた漁業者はイルカを駆逐することを試み、1978年には1000頭以上ものイルカが捕獲された。漁業者は「イルカがいなければ、様々な魚がもっと増えるはずだ」という主張をしていた。野生生物の保全に携わりたいものにとって、この漁業者の意見に反論したいところだが、残念ながら海洋生態系におけるイルカの役割は解明されていないという。

「生物多様性はなぜ重要なのか」という問いかけに対し、「生物は相互に複雑に絡み合っており、一種の欠損が生態系に大きな影響を与えるため」とか「人間が生態系サービスを受益し続けるた

め」、「持続可能な社会に生きるため」などの回答が用意される。が、具体的にこういった内容を把握するのは難しい。この壱岐でのイルカの事例とイルカの海洋生態系における役割は、こういった回答を肌で感ずる好例であろう。

全体を通じ：告白すると、私(大杉)は鯨類についてあまり詳しくない。なので、読み進めるのは、正直、難しい部分もあったが、各小型鯨類の生態について非常に詳しく記載されていたので、一気に情報を得ることができた。また、捕鯨について激しい賛否両論があることは知っていたが、ただそれだけであった。いや、今なお、自分の結論は出せなかったが、少なくとも、偽りのない科学的データ、根拠に基づき議論することは非常に重要であることは理解できた。そして、鯨類を保全しつつ利用する上で、その管理の難しさと生態学的研究の重要性を感じられたのは収穫であった。(大杉 文貞)

引用文献

浅川満彦. 2014. 書評『イルカー小型鯨類の保全生物学』. 生物科学 65: 185-186.

Kasuya T. 2017. *Small Cetaceans of Japan: Exploitation and Biology*. 476pp, CRC Press, Florida.